

# ARTA



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

## 「灼熱に耐え、再び頂点へ」

2019 ARTA DIGITAL Rd.4 THAILAND  
FIGHTING AGAINST BURNING HEAT







AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

# ARTA



今年のタイには雨が落ちてこない。激しいスコールの襲来がなく、厳しい暑さの下で決勝のスタートを迎えた。GT500クラスを戦う8号車ARTA NSX-GTは伊沢拓也がステアリングを握って8番グリッドから上位を狙う。予選ではトップまで僅差であったため、十分にチャンスはあった。1周目に7位に浮上した伊沢だったが、2周目にスピンを喫してしまい最後尾に後退してしまった。それでもまだ諦める必要はなさそうだとエンジニアの星学文が伝える。



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

ARTA



伊沢「ハアッ、ハアッ、ごめん、スピンした！」

星「了解、了解。ここから頑張ろう。タイヤは大丈夫？」

伊沢「はい、大丈夫です」

星「次の周から 300 が出て来ます。上手く処理してポジションを上げていこう。ペースは良いよ。今全体のベスト」  
トップと同等以上のペースで追い上げる伊沢は、すぐに下位のマシンに追い付いて前を塞がれるようなかたちになった。

そこでエンジニアの星は早めのピットインを提案した。

純粋なペースが良いのなら、前を塞がれず自由に走れる状態にしておきたいからだ。



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

**ARTA**



星「トップとのギャップはずっと変わらず 20 秒」

伊沢「了解、了解」

星「あと 4 周でウインドウオープンです。前の 1 号車に引っかかっている感じがあるから、ミニマムで入れちゃおうかと思ってます」

伊沢「引っかかっているという感覚はなくて同じくらいのペースだけど、それでも良いよ」

星「了解、25 周目で入れます」



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

**ARTA**





AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

**ARTA**





一方、GT300クラスを戦う55号車 ARTA NSX GT3 は高木真一がスタートドライバーを務める。

ランキング上位につける55号車には57kgという厳しいハンディキャップウェイトが搭載され、なおかつNSX GT3にとって初めてのサーキットということでデータも無く厳しい戦いになるはずだったが、このチャーン・インターナショナル・サーキットが初体験の福住仁嶺が予選5位という好タイムを記録した。



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

ARTA





AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

**ARTA**



しかし暑さのせいかブレーキのABSが不調となり、高木は2周目に止まりきれずコースオフして4つ順位を落としてしまった。

エグゼクティブアドバイザーの土屋圭市とレースエンジニアの一瀬俊浩が

高木「ちょっとツライなあ……」

土屋「真一、無理しなくて良いよ。周りがタレてくるまで待て」

高木「結構ブレーキが効かなくなってきたねえ」

一瀬「了解。結構温度が高いので冷やしながら走ってください」



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

ARTA



8号車と同じくレース開始直後にポジションを落としてしまった55号車だったが、  
こちらペース自体は速く、まだまだ諦める必要はなかった。

一瀬「今上位勢のペースが落ちてきて高木さんと同じくらいです」

高木「はいよ～、これから頑張ります！」

土屋「頼むよ～！」



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

ARTA



高木はエアコンをオフにして少しでもエンジンパワーのロスを抑えて走るが、それでも前走車を追い抜くことは容易ではない。そこで浮上したのはタイヤを2輪交換にしてストップ時間を短くする戦略だった。

一瀬「今ポジション12。もし2輪交換にすれば初音ミクの前くらいに出られるかもしれないんですけど、タイヤはどう？」

高木「今のところ大丈夫、安定してる。なるべくリアで走るようにしてる。その作戦でいくしかないでしょ」

一瀬「仁嶺、ヘルメット以外は用意しておいて。もうウインドウに入ってるから」

高木「もしオレのペースが遅いんだったら4輪交換だよ、これ。ちょっとだけいつものところがアンダー。ずっとオフだからね、エアコンは」

一瀬「了解。だとしたらちょっと厳しいかな。上位は34秒台で周回しているから」

しかし高木はそこからペースアップしてきた。

一瀬「この周ラップタイム良いよ。このタイムならフロント無交換にしたいな」



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

ARTA





**AUTOBACS**

**Arai**  
HELMET

SMITH

**BRIDGESTONE**

SUNLINE ARTA

上野田 一平  
ARTA RACING TEAM



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

**ARTA**



そう言っていた矢先の33周目、GT500クラスの数台が絡む事故が起きた。そこに巻き込まれていたのは、野尻智紀がドライブする8号車だった。

野尻「ああ～、壊れたあ……」

星「何が壊れた!？」

野尻「ごめん、当たった。左リア。当てられた感じもあるけど……」

星「動けない？」

野尻「サスペンションが折れてる」

星「了解、了解」

野尻「前で16と1が当たって、1が内側に入って来て、16も内側に入って来たのを抜いて行こうとしていたら左リアが当たったっていう感じ」

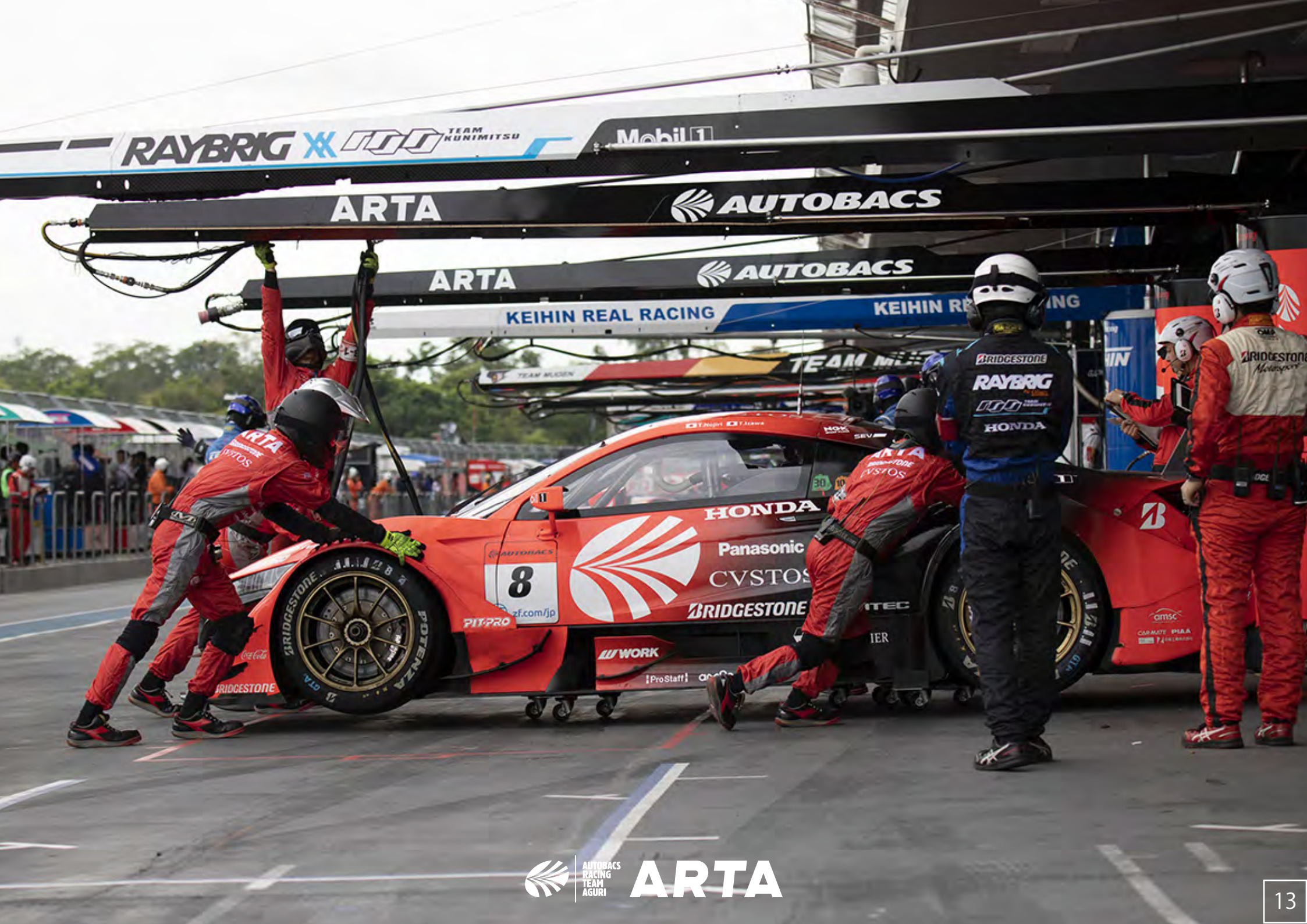
これでセーフティカーが出る可能性を考慮した一瀬は、すかさず55号車をピットに呼び入れた。



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

ARTA





RAYBRIG X



TEAM KUNIMITSU

Mobil 1

ARTA

AUTOBACS

ARTA

AUTOBACS

KEIHIN REAL RACING

KEIHIN REAL RACING

HONDA

Panasonic

CVSTOS

BRIDGESTONE

8

PIT-PRO

WORK

ProStaff

BRIDGESTONE

RAYBRIG



HONDA

BRIDGESTONE

MotorSport



AUTOBACS RACING TEAM AGURI

ARTA



一瀬「8コーナーイエロー。SC出るかもしれないから入ろう！リア2輪交換でいこう。フロントは要らない！」2輪交換に合わせてドライバー交代の時間を短縮するため、チームはクールスーツに接続する氷の交換を行わないことを決めた。交換しなければレースの最後まで氷が保たない可能性があり、福住はクールスーツを脱いでコクピットに向かう。ポジションを上げるための捨て身の戦略だった。



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

ARTA





AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

**ARTA**





一瀬「SC に入った」

福住「あと何周あるの？」

一瀬「あと 25~26 周」

福住「了解、クールスーツ着いてないから！」

一瀬「頼むね！」

福住「フロント無交換だけ？」

一瀬「そう、だからアウディの前に出られた。実質 8 位か 9 位かな。リアタイヤのマネージメントだけしっかりね」

福住「了解。大丈夫、全然大丈夫」



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

ARTA



しかしレースが再開されると途端に厳しさが増した。ただでさえサウナのような暑さになるレーシングカーのコクピット内は、灼熱のタイではさらに厳しい環境になる。NSX GT3 にはエアコンが搭載されているとはいえ、それは市販車のような涼しさをもたらすようなものではない。サウナに涼風を流してもほとんど効き目が無いのを想像してみればいい。

福住「ヤベェ、暑いぞこれ……」

一瀬「ゆっくり走ってるときはエアコン使って良いからクールダウンしておいて」

土屋「仁嶺、集中していけ。ポイント取って帰るぞ。今実質9位だ」

福住「暑いけど頑張ります」



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

ARTA





しかし周回が進むに連れて福住は意識がもうろうとするほどの状態になり、それでもなんとかポジションをキープして走りつづけていく。

福住「いやぁ、キツイ。ホントにキツイ……」

一瀬「後ろは紫のGT-Rになった。気をつけろ」

福住「あと何周？」

一瀬「あと13~14周。まだポイント圏内だ、頑張れ」

福住「今何位？」

一瀬「今ポジション10」

福住「あぁ～、ドリンクもない。ヤバい……」



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

ARTA



セーフティカー導入に合わせて緊急ピットインを行なったため、クールスーツについていたドリンクチューブも取り外され、それを着け直す時間がなかった。だから福住はクールスーツが無いどころかドリンクも飲むことができない状態での走行を強いられていたのだ。脱水症状寸前で意識が飛びそうになりながらも、福住は耐えに耐えて走りつづけた。







福住「あと何周？」

一瀬「あと9周、あと9周頑張れ」

福住「暑い……」

土屋「仁嶺、頑張れ。1ポイントだよ」

福住「なんか喋ってて！」

誰かが喋りかけていなければ意識を失いそうだと言わんばかりに、福住は無線で訴えかけた。

長い、長い9周を走り切り9位でチェックカードフラッグ。


これ以上無いほどに苦しい状況の中で、1ポイントを掴み獲った。



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

**ARTA**





一瀬「オーケー、グッジョブ！ポジション9！」  
土屋「よくやった、お疲れ！ポイントゲットだ！」  
福住「水、とにかく水ちょうだい。冷たいお風呂！」  
一瀬「ゆっくり戻っておいで」  
福住「ゆっくりじゃ嫌だ、早く帰る！」



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

**ARTA**





8号車は速さがありながら不運でチャンスを失ってしまったが、55号車はポイントを掴み獲った。たかが2ポイントだろうと、されど2ポイント。チャンピオンシップを狙うARTAにとってはどんなポイントさえ重要な一歩となる。そしてなにより、苦しく絶望的な中でも自ら活路を切り拓きポイントを勝ち獲ったというその事実が大きな意味を持っていた。

タイでこの上なく大きな収穫を得たARTAは、再びランキング首位を取り戻してシーズン前半戦を終え折り返した。



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

**ARTA**





EAU ROUGE  
0000

Arai  
HELMET

M. Yamoto

272

Arai  
HELMET

27

どなかりクリニック

281.18

Honda RACING

AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

ARTA

LONDA





AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

**ARTA**





AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

**ARTA**





ARTA

CVSTOS



ARTA



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

ARTA





株式会社オートバックスセブン

# ARTA

THE "BIG RACE" FOR SUZUKI AGURI STARTED IN 1998  
AS HIS VISION FOR THE FUTURE. OVER THE YEARS, IT HAS EVOLVED  
THROUGH THE TOUGHNESS AND WILL OF ARTA. IN THAT SPIRIT,  
ARTA IS RACING TO INSPIRE THE FUTURE OF MOTORSPORTS.



ARTA Project



ARTA DIGITAL You tube チャンネル

To Be continued next race...

**ZERO**  
BORDER  
Team ZEROBORDER

©2019 ZEROBORDER INC. All rights reserved. No reproduction or republication

Director and Photographer : Masakazu MIYATA

Text : Mineoki Yoneya

Design : Hiroaki KATAYAMA

Special Thanks : AUTOBACS SEVEN CO., LTD